

現在の広範囲で活発な臨床応用の要求に必ずしも適合する態勢とはいえない。その立ちおくれに伴う制度や運営上の問題は今後の需要の拡大につれ、一層切実になってゆくものと考えられる。

それらの問題点について要約すると、

1. 臨床応用については、その技術やデータの分析にあたり臨床各科の専門的知識を必要とするが、各専門分野の人々が積極的に参加できる機構が十分でない。

2. 高価な測定記録機器の購入整備には、使用者の要望に応じ、かなりの程度の RI 検査、治療が必要に応じて施行できるような態勢が整えられることが必要であるが、必ずしも十分でない。

3. 大学病院としての教育研究上の目的が達成され易いように設備や機器が使用できるための運営面の配慮が必要であること。

などにまとめられると思う。

以上のごとく、核医学が内科、放射線科を中心にして各科にまたがる境界領域の臨床応用の医学分野であるという特殊性をもち、高価な機器や放射性医薬品と基準に適合した特別の施設を使用するという点に、さらに、大学病院の教育、研究機関としてのみならず、診療機関としてその地域社会であるいは唯一の RI 使用施設であることを加味して考慮するならば、核医学をより効果的にとり入れ、運営することが是非必要となってくる。

現状にもとずき、一内科医として私見を述べ、批判を仰ぎたい。

*

4. 九大病院における核医学の現況

渡辺克司

(九州大学 放射線科)

核医学は RI を用いて診療を行なうものであるが、今後、この方面における RI の利用は益々増加してくるものと考えられる。

医学における RI の利用は、大きく分けると、機能的検査と形態的検査がある。いずれも RI の放出する放射線を頼りに診断を行なうものであるから、核医学診療の中心は放射線科であると思う。しかし、実際には RI の利用が医学の極めて広い領域に及ぶため、放射線科のみで全般をカバーすることは困難である。病院における RI 診療が合理的に行なわれるためには、管理、運営と設備が充分であることが必要である。これによって各診療科との協調が可能になる。

九大病院における、RI 診療の現況について述べた。

*

5. 当院における RI 診療

佐々木 潔

(国立福岡中央病院 放射線科)

最近の核医学の進歩は目ざましく、ことに診断面では、従来盲点とされていた検査が可能となり、また他の検査法では、非常に手間のかかるものが簡単に検査できるようになったりして、極めて重視されるようになった。総合病院においても、RI 診断に対する各科の認識が高まりつつあり、かつ要望も増してきている。

総合病院において、核医学が十分よく生かされて行くためには、専任の医師の存在が必要である。しかし多くの病院においては、放射線科の医師は少数であり、手不足であることが多い。当院もその例外ではない。当院ではこれを補うため、技師1名をおき、医師の仕事を最小限に止め、他はすべて技師の手に委ねることにしている。当院でこれまで実施した RI 検査法は、甲状腺、肝、肺、腎、脳、心縦隔、脾、脾などのシンチグラム、甲状腺摂取率測定、レノグラフィ、組織クリアランス、心放射図などの動態機能検査、脂肪消化吸収試験、赤血球寿命測定、血漿鉄消失曲線、V-B₁₂ 吸収試験、アイロソルブテストなどである。このほかにも他科から要求されている検査があるが、医師の手不足で実施できずにいるものもある。長近はテトラソルブテストやイムノアッセイなどの生化学的検査が開発されてきており、他科からの要望も多い。これらの検査法は医師の手を必要とせず。

今後伸ばして行くことのできる検査法と考えている。

更にはシンチカメラなど、設備を向上させて、検査の能率化や、新しい検査法を取り入れて行くことも必要と考えられる。

総合病院における診療のもう一つの問題点は、未だ健康保険に採用されていない RI が多いこと、国立病院では、RI 検査点数が検査科の点数に入れられること、などである。これらの改善が望まれる。

*